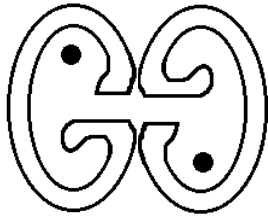


日本双生児研究学会ニュースレター



《第 43 号》

Newsletter of Japan Society for Twin Studies

2008 年 8 月発行

目次

日本双生児研究学会第 23 回学術講演会のご案内	2
日本双生児研究学会第 25 回研究会講演記録 「見えない病気をさぐる」 加藤憲司 (国際医療福祉大学小田原保健医療学部)	4
「卵性差と母親の扱い差」 天羽幸子 (ツインマザーズクラブ)	7
2008 年度日本双生児研究学会幹事会議事録	11
日本双生児研究学会 2008 年度総会報告	12
お知らせ・追悼	14
日本双生児研究学会第 26 回研究会のお知らせ	16
編集後記	16

会員募集のお知らせ

入会を希望される方は郵便振替用紙に口座番号(00910-2-253840)、加入者名(日本双生児研究学会)をご記入の上、年会費(3,000円)をご送金下さい。また、通信欄に所属・所属の住所・電話番号・FAX番号・E-mail等をお書き添え下さい。

<事務局の住所等が変わりました。ご注意ください。>

〒565-0871 大阪府吹田市山田丘1-7

大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻
日本双生児研究学会事務局(早川和生)

TEL & FAX: 06-6879-2550

E-mail: hayakawa@sahs.med.osaka-u.ac.jp

◆◆◆◆◆ 当学会のホームページが引っ越ししました ◆◆◆◆◆

事務局の移転に伴い、日本双生児研究学会の公式ウェブサイトも大阪大学保健学科のサーバー内に置かれてリニューアルしました。会員の皆様への情報発信や双子研究のますますの発展に役立てられるよう、内容の充実を図っていきたくと思います。新しくなったウェブサイトをどうぞ宜しくお願いいたします。
(文責: 加藤憲司)

新 URL: <http://sahsweb.med.osaka-u.ac.jp/~jsts/index.html>



日本双生児研究学会

第 23 回学術講演会のご案内

【日時】 2009 年 1 月 25 日（日） 午前 10 時～午後 4 時 30 分

【会場】：大阪市立大学大学院看護学研究科（阿倍野キャンパス）

（→【交通のご案内】参照）

〒545-0051 大阪市阿倍野区旭町 1-5-17 電話 06-6645-3536

【プログラム(予定)】

9:30	受付開始
10:00	開会
10:05～12:00	一般演題（1）
12:00～13:00	昼休み（幹事会）
13:00～13:30	総会
13:30～16:30	一般演題（2）
16:30	閉会（次期大会会長挨拶）
17:00～18:00	懇親会



一般演題（研究発表・報告）募集

今回の学術講演会は、前回と同様に、一般演題（各 15 分：発表 12 分、質疑応答 3 分を目安）の口頭発表を中心に構成し、1 つの会場のみで行うことを予定しております。育児支援関係のご報告も、この一般演題の中で行いたいと思います。前回同様、多様な演題が多数寄せられますよう、みなさまのご参加・ご発表をよろしくお願いいたします。

発表・報告いただける方は、演題・発表者名・全員の所属および発表要旨（600～1000 字程度）を A4 用紙 1 枚にまとめて、郵便またはメールに添付してお送りください。なお、発表時に使用できる機材は Windows の PowerPoint を想定していますが、それ以外の必要がある場合には申し込み時にお書き添えください。

【締切】 2008 年 11 月 4 日（火）（必着）

【送り先、およびお問い合わせ先】

〒545-0051 大阪市阿倍野区旭町 1-5-17

大阪市立大学大学院看護学研究科

（日本双生児研究学会第 23 回学術講演会大会事務局）

横山美江 宛

電話：06-6645-3536

E-mail : yyokoyama@nurs.osaka-cu.ac.jp

【会費など】

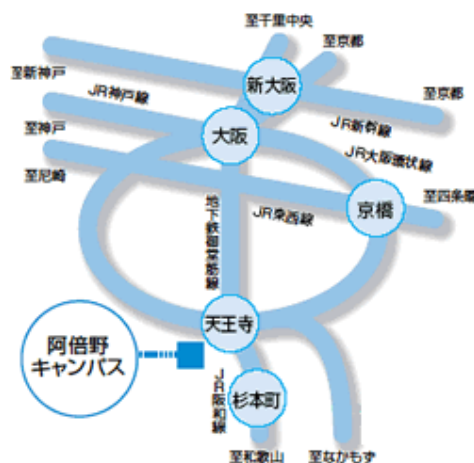
参加費： 2,000 円 （多胎児の会の方は 1,000 円） ※当日徴収させていただきます。

【交通のご案内】

大阪市営地下鉄御堂筋線・谷町線の「天王寺」駅、J R 西日本の「天王寺」駅、近鉄南大阪線の「大阪阿部野橋」駅より西へ徒歩 10 分くらいです。

《乗り継ぎ例》

- ★ 新大阪→（地下鉄御堂筋線）→天王寺：実車約 25 分
- ★ 大阪→（地下鉄御堂筋線）→天王寺：実車約 20 分
- ★ 関西空港→（J R 阪和線）→天王寺：実車約 1 時間

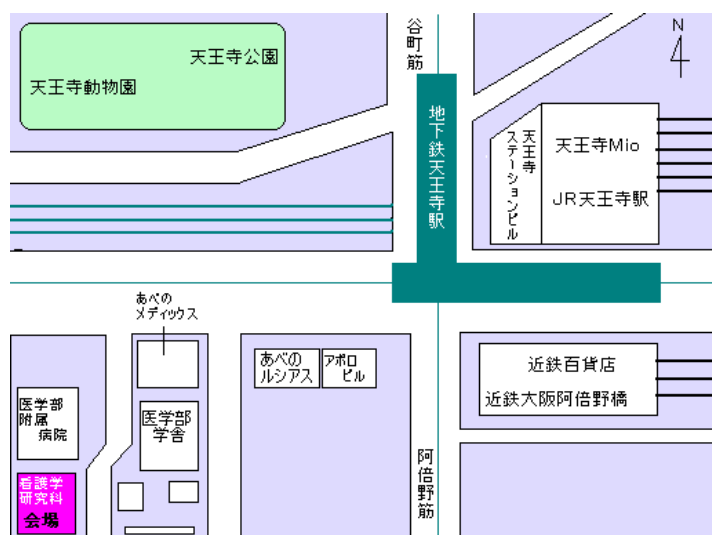


《天王寺駅→大阪市立大学（阿倍野キャンパス）》

- ★ 大阪市営地下鉄御堂筋線「天王寺駅」・・・西改札⑭出口を出て直進
- ★ J R 西日本「天王寺駅」・・・中央改札 南出口
- ★ 近鉄南大阪線「大阪阿部野橋駅」・・・西改札

* J R、近鉄線の場合には、歩道橋を使い、J R 天王寺駅と対角線にある方へ渡って大通りに沿いに直進

きんえいアポロビル、あべのルシアスを左手に見るように道なりに歩きます。信号を渡るとあべのメディアックスがあります。その建物を越えた道を左に入ってくださいと、右手に大阪市立大学医学部附属病院、さらに歩くと会場である看護学研究科の建物があります。



【宿泊】

天王寺駅周辺にはいくつかホテルがございますが、大会事務局では予約の斡旋はしておりませんので、必要な方は各自でご予約いただくようお願いいたします。

日本双生児研究学会第 25 回研究会講演記録

「見えない病気をさぐる – Investigating Invisible Illnesses –」

2007 年 11 月 10 日 於慶應義塾大学

加藤 憲司（国際医療福祉大学小田原保健医療学部）

はじめに

筆者は 2002 年 9 月から 2007 年 3 月まで、スウェーデン王立カロリンスカ大学医療疫学部において双生児研究に従事した。同学部は世界最古・最大のツインレジストリー（双生児登録所）の一つである The Swedish Twin Registry (STR) を擁することで国際的に名高い。STR については Newsletter 第 37 号（2005 年 8 月発行）でもご紹介したところである。本稿では、カロリンスカ大学での筆者の博士研究を題材に、疫学分野における双生児研究の可能性について論考したい。

1. The Swedish Twin Registry

1) 概要

まず STR の概要を簡単にまとめておく。STR は 1950 年代後半、生活習慣と循環器疾患との関連を調べるうえで遺伝的要因の影響を統制するために双生児を研究対象としたことに始まる。よく知られているように北欧諸国では国民のデータベース登録が国策として実施されており、人間集団を対象に健康問題の分布や要因を調べる「疫学」という学問にとって理想的な研究の場となっている。STR ではそうした国のデータベースから二次的に双生児を把握することにより、1886 年以降に国内で産まれたほぼ全ての双生児の氏名・住所・出生地・存命中か否かといった情報を保有・管理している。その数は現在、およそ 17 万人に上る¹⁾。

2) 現在の活動内容

Newsletter 第 37 号でのレポート以降の STR の動きについて、Lichtenstein et al¹⁾の記述を基に二、三ご紹介する。

- ① SALT：第 37 号で紹介した SALT Study における最近の成果には、認知症の縦断的研究（HARMONY）、Parkinson 病の神経学的研究、COPD（慢性閉塞性肺疾患）研究、それに本稿で後述する CFS（慢性疲労症候群）研究が挙げられる。それに加え、SALT Study に参加した成人双生児からの血液サンプルを蓄積・保存するバイオバンクが設立された。これはヨーロッパ連合（EU）の GenomEUTwins プロジェクトと共同で DNA と血清を抽出・分析し、いわゆるゲノム疫学的研究を行おうとするものである。現在、1 万組以上の成人双生児からのサンプル収集を目指し、精力的に活動が進められている。
- ② STAGE：1959 年以降に産まれた双生児を対象とする SALT Study の拡大バージョンは STAGE（The Study of Twin Adults: Genes and Environment）と呼ばれる。ウェブ上の質問票で情報収集を行うことが大きな特徴であり、2005 年 5 月に開始された。現在、禁煙の遺伝的ならびに環境的決定因子の縦断研究、間質性膀胱炎の研究が実施されている。
- ③ CATSS：小児～青年期の双生児約 1400 組を対象とする CATSS（The Child and Adolescent Twin Study in Sweden）は 2004 年 9 月に開始された。9 歳と 12 歳の双生児の父母へのインタビューにより、誕生時から現在までの健康状態、問題行動、親子関係、生活環境などに関する様々な情報が収集されつつある。

3) CFS プロジェクト

筆者の博士研究は SALT Study のプロジェクトである慢性疲労症候群研究の一環であり、主に同疾患の発症予測因子としての性格とストレスの影響、および慢性疲労症候群とその種々の併存疾患 (co-morbidity) の病態メカニズムにおける遺伝・環境要因の作用モデルの検討を実施した。博士論文では 4 編の原著論文を基に、後述の機能性身体化症候群という疾患概念がこれらの併存疾患群をどこまで説明し得るかについて論じた。次節ではこの博士論文のハイライトである第 4 論文²⁾の内容を紹介する。

2. A population-based twin study of functional somatic syndromes

1) 背景

医学の目覚ましい進歩にもかかわらず、原因不明の疾患は現在も数多く存在する。中でも、血液検査・X 線・MRI・組織生検などのいかなる臨床検査法を用いても異常が見当たらない場合、その発症メカニズムの解明や治療方法の確立が困難を極めることは想像に難くない。こうしたいわゆる medically unexplained diseases (医学的に説明されていない疾患) の代表的なものに、慢性疲労症候群 (chronic fatigue syndrome)・線維筋痛症 (fibromyalgia)・過敏性腸症候群 (irritable bowel syndrome) などがある。これらは多様な症状を呈し、しばしば同時に発症する (co-morbidity) ことが知られている。さらに抑鬱・不安などの精神症状を伴うことも少なくないため、他の病氣と誤って診断されたり、「気のせい」で済まされてしまいかねない。潜在的な罹患者数は多いと推測されているが、大半は診断名が付かないままドクターショッピングを続けたり、家族や職場の理解を得られずに苦しんでいるのが実情である。

2) 目的

上述の個々の症候群を対象とした双生児研究によると、これらはいずれも遺伝的要因がその発症に影響していることが示されている。だがこうした症候群がしばしば併存することがこれらに共通する発症要因の存在に起因するものであるか否かは不明である。近年、S. Wessely³⁾を初めとする研究者らは、機能性身体化症候群 (functional somatic syndromes: FSS) という疾患概念を提唱し、これらの症候群を統一的に説明しようと試みている。しかし FSS 説の真否を実際のデータによって検討した研究は未だ報告されていない。そこで筆者らは STR の大規模な双生児集団を対象に、FSS の病態メカニズムに関する量的遺伝学モデルを提示するとともに、その遺伝・環境要因のそれぞれの影響の程度を推計することを目的として本研究を実施した。

3) 方法

STR の成人双生児のうち 1935 年 1 月から 1958 年 12 月までに生まれた者を対象に、コンピュータ・システムを用いた電話インタビューにより、慢性疲労・慢性全身性疼痛 (chronic widespread pain)・過敏性腸症候群・再発性頭痛・大鬱病・全般性不安障害のスクリーニングを 1998 年 3 月から 2002 年 12 月にかけて実施した。いずれの疾患も、研究実施時点での標準的な診断基準をもとに構造化・盲検化された質問を用いてスクリーニングを行った。解析には構造方程式モデリングを用い、最適なモデルを AIC (赤池情報量基準) により判定するとともに、各潜在因子の寄与率を最尤推定法により算出した。計算には双生児研究の標準的な手法である Mx プログラムを用いた。

4) 結果・結論

疫学研究で示されているように、上述の症候群の罹患者は大部分が女性であり、男性は少数

にとどまった。そこで 41～64 歳の双生児女性 16,440 人から得られたデータを解析した結果、2 個の共通潜在因子を持つ病因モデルの適合度が最も高いことがわかった。それらの因子のうち一方は抑鬱と不安における全ての遺伝的影響を説明し、他の 4 疾患にもある程度影響していた。もう一方の因子は精神疾患以外の 4 疾患のみを説明し、特に慢性全身性疼痛への影響が大であった。また、いずれの疾患も個別の潜在因子による影響を併せて受けていることが認められた。

以上のことから、慢性疲労とその併存疾患群（精神疾患を含む）は 2 種類の潜在因子を共有しており、そのうち一方は抑鬱と不安の遺伝要因と強く関連しているのに対し、もう一方は痛みの感覚経路における過剰反応との関連が見受けられた。また、個々の疾患に固有の特徴は個別の潜在因子の働きによるものである可能性も示唆された。

3. Twin studies for psychosomatic epidemiology

1) 双生児研究の可能性

前節で紹介した研究は、慢性疲労症候群を初めとする原因不明の疾患を対象としており、かつ FSS という仮説段階の疾患概念を扱っていた。このように病態メカニズム解明において未だ初期段階にある研究では、種々の共通あるいは個別の潜在因子の作用に関する全体構造を視覚化するとともに、遺伝ならびに環境要因の相対的影響度を推計することで今後の研究の然るべき道筋を提示し得るという点で、双生児研究法の果たす役割が極めて大きいと言える。

2) 心身疫学

本稿では紹介できなかったが、双生児を用いた疫学研究法には、双生児ペアのうち一方のみが疾患を発症しているようなケース（不一致ペア）を用いて、その発症に関連する環境要因の影響を調べる co-twin case-control study と呼ばれる方法がある。筆者の博士論文のうち第 3 論文⁴⁾では、慢性疲労のスクリーニングの約 25 年前（1972～73 年）に測定した性格とストレス感が、その発症に影響を与えるかどうかを縦断的データにより調べた。その結果、情動的な性格およびストレス感の存在が発症確率を高めることが認められたが、それぞれの作用機序は異なることが示唆された。生活習慣病などの多因子で慢性に経過する疾患の発症において、ストレスなどの心理社会要因がどのような影響をもたらすかを調べることで、双生児研究法はそうした疾患の予防方策の探究に貢献し得るであろう。筆者は心身疫学⁵⁾という新しい学問分野を提唱しており、そこに双生児研究の大いなる可能性を見出しつつある。

引用文献

- 1) Lichtenstein P, Sullivan PF, Cnattingius S, et al. The Swedish Twin Registry in the Third Millennium: an update. *Twin Research and Human Genetics*. 2006;9(6):875-882.
- 2) Kato K, Sullivan PF, Evengard B, Pedersen NL. A population-based twin study of functional somatic syndromes. *Psychological Medicine*. in press.
- 3) Wessely S, Nimnuan C, Sharpe M. Functional somatic syndromes: one or many? *Lancet*. 1999;354:936-939.
- 4) Kato K, Sullivan PF, Evengard B, Pedersen NL. Premorbid predictors of chronic fatigue. *Archives of General Psychiatry*. 2006;63:1267-1272.
- 5) 加藤憲司 予防看護学研究と新しい疫学 看護研究 2007;40(6):55-62.

卵性差と母親の扱い差

天羽 幸子 (ツインマザーズクラブ)

(1) ツインマザーズクラブの調査結果では、2006年から2卵性の組数が1卵性をこえた。

近年、2卵性の出生はふえ、1卵性の2倍くらいになります。ツインマザーズクラブは数年おきに調査を行い、結果をまとめていますが、2006年の学令期を対象にしたもので、はじめて2卵性の組数が、1卵性をこえました。2003年に18歳以上を対象としたものは、2卵性は1卵性の半分で、この年代の人たちの出生時にはまだ不妊治療が行われていなかったことを示しています。

私たちの調査は結果を選択肢で示すものではなく、自由記述で答えてもらうようになっているので、その行間に卵性差による子どもに対する扱い差というか、接し方の違いをみることができました。

今回の調査結果でも、2卵性の組数は少なく、卵性間の比較をするには不十分ですが、あえて、卵性差による母親の扱い差としてとりあげました。それは、これからますますふえると考えられる2卵性の増加を、1卵性と比べ、遺伝子の類似度が異なるというだけでなく、ふたごはそっくりと期待している日本の社会全体の中で、教育的に多くの問題を含んでいると思われるからです。

調査結果としてまとめた組数について、表1に示します。

18歳以上の調査では127組、学令期では310組を回収しました。調査の内容、回収の方法は、2つの調査でほとんど同じです。しかし回収率は学令期44%、18歳以上は75%と大きく違っていません。学令期では1卵性は300組に郵送し、2卵性は460組に郵送しましたが、2卵性の回収率は更に低く、35%となっています。この回収率から多くのことを推測するのは危険ですが、母親たちが早くからそれぞれ違ったふたりの人間としてみている結果いわゆるふたご的調査への関心が低くなった結果なのかもしれません。

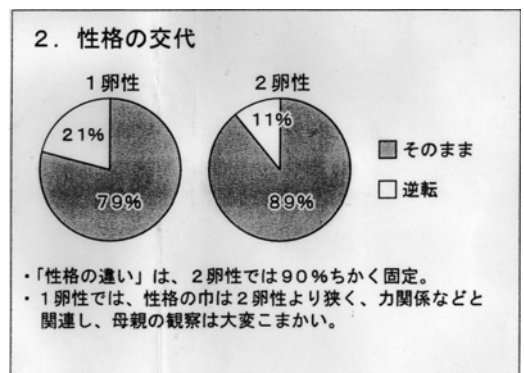
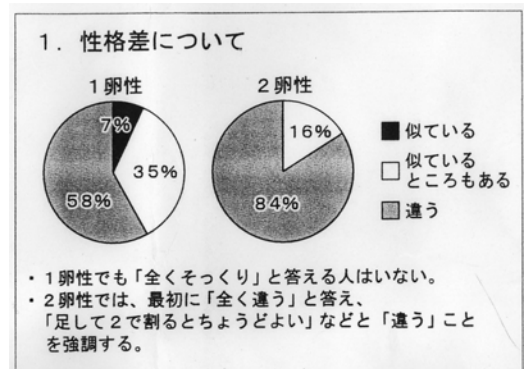
(2) ふたりの間の性格差についての受けとめ方

・性格差

ふたごの対間の性格について、1卵性でも「全くそっくり」と答えた人はありませんでした。

2卵性では、第1行目に「全く違う」という表現が圧倒的に多く、そのままのように違うのか、具体的には何も記述されないものもありました。「足して2で割るとちょうどよい」などと、違うことを強調するものもありました。(図1参照)

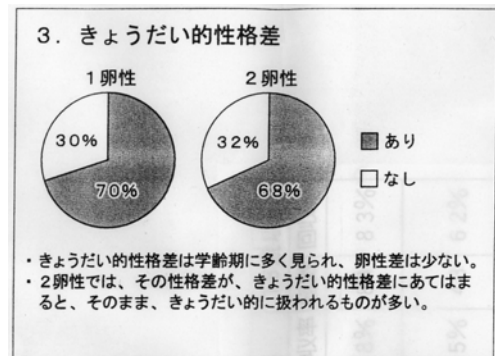
この最初にみられた性格差について、2卵性ではそのまま変わることなく固定しています。(図2参照)これに比べて1卵性では「違う」といっても、ふたりを比較することによって違うことが多く、2卵性の性格差の度合とは差があると考えられます。1卵性ではその違い方を、ひとりは自制的、他は自由奔放型というようにふたりを比較した性格の違いが詳しく記述されていました。このため成長過程で力関係や集団への適応状態によって、性格差は逆にな



ったようにみえることもあります。しかし縦断的にみると、その違いは再び元に戻ったり、その差が微妙であることが感じられます。1卵性の母親たちは、それをこまかく観察し、自由記述の量も2卵性と比べて、たくさん書かれています。

・きょうだいの性格差

いわゆる年齢差のある「きょうだいの性格差」については、比較されることが多い学令期に最も多くみられ、これには卵性差がみられませんでした。家庭でふたりをきょうだいとして扱っているものは、2卵性に2例ほどみられましたが、ほとんどありません。しかしまわりの人は、ふたごに対して、「どちらがお兄さんか」と聞くことが多いのです。2卵性で先に生まれたA児の性格がより兄らしい性格であると、そのまま、まわりの人からきょうだいの扱われることが多くみられました。日常的には、きょうだいとしての扱い差はみられないのに、佛事などあると、A児の方が喪主とされたり、世襲の家業があると、A児がそれをつぐという場合もあります。(図3参照)

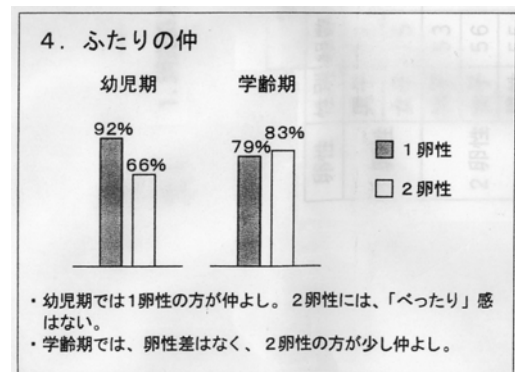


・ふたりの仲

2卵性のケースが少なかった頃の研究では、2卵性では性格差があり、ふたりの仲も1卵性ほど親密でないという結果もみられました。

今回、乳幼児期と学令期のふたりの仲を継続的に2回調べてみました。乳幼児期では1卵性はふたりが常に一緒に、離れて遊ぶことが少ないのに比べて、2卵性ではそのような「べったり」タイプではなく、けんかも多く、時々仲良しという状態でした。

しかし学令期以降をみると、2卵性は小さい頃より、よく話し合う機会もふえ、それぞれ協力して遊べるようになったという報告が多くみられました。パーセントでの比較によると、1卵性よりも仲良し組がふえています。これについてはもう少し詳しくみる必要がありますが、少なくともふたりの仲では卵性差がなくなると考えられます。言葉の少ないツアー時代は意志の疎通が1卵性ほどよくなかったのが、集団の中で生活するようになり、それぞれが居場所をみつけ始めたのかかもしれません。(図4参照)



(3) 男女の双子児について

今回の調査では同性の2卵性は109組でしたが、ほぼそれと同数の異性の協力を期待していましたが、ちょうど半数の55組の協力を得られました。少数ですが、今まで考えられていた傾向と異なる結果もみられましたので、その点についてふれておきたいと思います。

・男女のふたごの性格差

ふたりの性格差については「全く違う」「違う」と書かれ、「異性なので全く違う」と異性を強調して書かれたものはわずかでした。

異性双子児のふたりの性格差は、いわゆる男の子的性格、女の子の性格がとりあげられると思っ

ていましたが、この学令期の時点ではそのようでないことがわかりました。

男の子の性格としてあげられるものをまとめると、慎重、おっとり、やさしいという言葉が並び、その次にマイペース、やんちゃという性格表現が加わります。

女の子の性格はしっかりもの、努力型、男の子の世話をするなど、ひとまとめにしていうなら、自制的で、きょうだいなら姉的性格が並んでいました。

男女の場合、全般的にみると、学令期までは女の子の方が発達のはやく、(例えばことばの発達など) しかも努力型で手がかからないので、母親としては安心し、扱い方も手抜きをする場合も多いようです。

やさしく、ちょっとひ弱な男の子に、母親は手を出し、気に向け、女の子の方はひとりで凶太く生きていくというタイプが多いのに驚きました。母親たちは男の子にもっとしっかりして欲しいと思いつつ、女の子の倍以上手をかけてしまって、反省しているという記述もありました。

しかし、この性格差はそれほど心配しなくてもよいようです。18歳以上のアンケートの結果では、しっかりと男の子らしく成長し、女の子をリードしているようでした。

・男女のふたごの関係

出生時に後から生まれた女の子で、兄、妹という序列がついている場合でも、乳幼児期から学令期までは女の子の方が世話をし、姉的役割を果たすものが多いようです。

中学3年頃から男の子の体格がよくなると、性格的に今まで控えめだった男の子も対等になり、逆にリーダーシップを取る例もいくつかみられました。

能力差があり、男の子が遅れている場合には、男の子に対して頑張って追いついて欲しいと願い、叱咤激励します。これに対して女の子が遅れている場合には、あまり何とかしようとする力を入れない母親が多いのです。男女平等が強調される社会で、お母さんは女性なのにと、考えさせられることでした。

男女のふたりにとって、1番気にするのは、小学校高学年の頃からの周囲の目や、冷やかしの言葉のようでした。ですから同じ学校でも時間をずらして登校したり、ふたり一緒の姿を友だちに見られないようにしているものも多いようです。学校での接触は少なくとも、家の中での親しさは、今までとあまり変わらないと記述されているものもありました。

全体的にみて男女のふたごの仲はよく、青年前期のふたりがさけあうような雰囲気があったとしても、それは成長期のひとつの過程であり、本来的にはふたりの仲は同性のふたりと同じように、仲が良いといえると思います。

(4) 平等な扱いを含むふたりの扱い方——2卵生を中心に

ふたごの親たちは、最初にふたりを平等に扱おうと考えます。ふたりの性格差についての気づき方は卵性によって大きく違います。2卵性では出生直後から、ふたりの泣き方、甘え方などから、性格の違いを感じます。

ひとことで解説するのではなく、お母さんが実際に書いている言葉を紹介します。

比較のため、最初に、1卵性についての平均的な例を2つ出します。

・よく人から、「ふたりの性格は似てる？」と聞かれます。私はそのたびに、大まかには似ているかもしれないけど、同じではないといいます。Aは自分の意志を押さえてBにゆずり、Bは自分の意志を通しがちというのが、小さい時からずっとみられます。

・Aはずっと抑え気味にみえて、内心ここぞと思う時に自分を通していました。Bは猪突猛進型で、強く自己主張するのですが、Aが固持すれば「姉にゆずる」という傾向があります。

1卵性については、ほとんどの人がふたりの性格を比較し、ふたりの関係のなかでとらえ、大変

こまかく表現します。

それに比べて、以下は2卵性についてです。

- ・よくもここまで極端に違うという感じ。こんなに違うふたごもいるもんだと感心していません。
- ・天と地というほど違うので、生活のリズムをあわせるのが大変。
- ・親もふたりの差に生まれてすぐ気づき、それを認めているので、その性格差を増幅しているのかもしれませんが。
- ・平等に思ったのはごく幼い時だけ。今は姉妹として扱っています。上下をつけた方が扱いやすいのです。
- ・Aは母似。Aと一緒にいるとき、私も心を開いている。Bは外見も内面も父似です。
- ・一番つらいのは、世間はふたりで一對のように考えたり、比較したりすることです。
- ・双生児なのにといわれて、「違う」ということを理解してもらうのに苦労します。

2卵性の性格差を、父親、母親の性格差に重ね合わせて、自分との相性を考えてしまう人も少なくありません。平等に接したいと思いながら、心の底で自分との相性を感じて、素直に報告するお母さんの気持ちもわかります。

2卵性の親たちは「ふたりの違い」を認めて対応しようとしているのに、祖父母やまわりの人たちは「ふたごなのに」「同時に生まれたのに」と「違い」について、いつまでも戸惑っている場合が多いようです。年齢差のある「きょうだい」だったら、性格差があっても、そのまま受け入れられるのに、「同時に生まれたふたご」であることが、似ていない2卵性ふたご育ての重荷になっているように考えられます。

1卵性の母親は、ふたりの違い方にかなりこまかい気遣いを持ち、扱い差を気にかけているようですが、2卵性では性格差、能力差について、それは仕方がないと受け入れてしまいます。能力差などでちょっと低い方ははじめから投げ出してしまっているようにみえる人もあり、本人たちが得意な所に居場所をみつけるまでの子育ての苦労を強く感じました。

この1卵性と2卵性の微妙な扱い方の違いは、教育的には重要な問題を含むものであると考えます。今まで、ふたご研究では同じ遺伝子を持つ1卵性が中心でしたが、2卵性の出生が増える現状のなかで、これから2卵性について、その違い方に、もう少しきめのこまかい研究が必要ではないかと考えています。

表1. 調査協力者

卵性	性別	学 齢 期			18 歳以上	
		組数	計	回収率	組数	回収率
1 卵性	男子	71	146	48%	84	83%
	女子	75				
2 卵性	男子	53	164	35%	43	62%
	女子	56				
	異性	55				
合計		310		44%	127	75%

2008年度第1回日本双生児研究学会幹事会

日 時： 2008年1月27日(日) 幹事会 12:00-13:00

場 所： 大阪大学コンベンションセンター

出 席： 今泉洋子、天羽幸子、杉浦祐子、小野寺勉、野中浩一、安藤寿康、加藤則子、加藤憲司、
早川和生、横山美江、大木秀一、志村恵

1. 平成19年度の活動報告

1) 研究会について： 以下の3つの研究会が実施された。

第25回 6月23日(土) 慶應義塾大学三田キャンパス

又吉國雄(所沢第一病院検診センター)

「最近の多胎管理をめぐって」

特別講演会 7月14日(土) 慶應義塾大学三田キャンパス

Dr. Kaare Christensen (Syddansk Universitet)

“Why do we age so differently? - The Danish Twin and Oldest-Old Studies.”

第26回 11月10日(土) 慶應義塾大学三田キャンパス

加藤憲司 (国際医療福祉大学小田原保健医療学部看護学科)

「見えない病気をさぐる (Investigating Invisible Illnesses)」

2) ニュースレターについて： 第41号を8月に、また第42号を12月に刊行した

3) 会員状況：現在の会員数 139名(前年度と比べ-1) 新規3人、退会4人、住所不明3人

2. 平成19年度の会計監査報告

3. 第22回学術講演会について

4. 平成20年度の活動予定

1) 第23回学術講演会(2009年)の準備状況について：開催地を引き続き検討することとした

2) ニュースレターについて： 第43号、第44号を刊行予定

3) 第27回研究会について

5. 平成20年度の予算計画について：(別紙参照)

6. 事務局の移転について：平成20年1月28日より、慶應義塾大学文学部(事務局長 安藤寿康)から大阪大学医学部(早川和生教授)に移転することになった

7. 名誉会員の推薦について：70歳以上の会員、学会長・大会長等貢献者が有資格者であることが確認され、今回は清水忠彦先生、飯田真先生、松井一郎先生の三名が推挙され承認された。

8. 学会のホームページについて

加藤憲司幹事が大阪大学事務局との協力で運営に当たることとなった

9. その他

2008年度第2回日本双生児研究学会幹事会議事録

日 時： 2008年5月10日

場所： 慶応大学(大学院棟1階、311教室)

出席： 今泉洋子、天羽幸子、杉浦祐子、小野寺勉、野中浩一、安藤寿康、加藤則子、
加藤憲司、早川和生

欠席： 横山美江、大木秀一、志村恵

議題（報告事項）

1. ニュースレターの進行状況

編集担当の幹事（横山、志村）が欠席のため、今泉会長より報告があり、次号のニュースレター発行については、志村幹事が掲載原稿を募集中であり、順調に編集が進んでいるとの報告があった。次号の発行は、例年通りの時期（7月末）を予定。なお、発送作業は、今回から大阪大学の事務局にて実施することになった。

2. 2009年1月の第23回学術集会の準備状況

大会会長（横山）が欠席であったが、予定通り大阪市立大学の横山幹事を中心に学術集会を開催することが確認された。

3. 学会のホームページについて

加藤憲司幹事より、新しいホームページを試作して既に、幹事にはメールにてURLの通知をしてあるので、新しいホームページに関して意見を募集中との報告があった。また、幹事からの意見として：

- ・新しいホームページを見た印象は、全体的に好感が持てる配色とデザイン（野中）
- ・旧ホームページに掲載されている双生児研究の頁についてはカットする。
- ・過去の学術集会の発表演題リストを掲載する。
- ・関連学会等のホームページとリンクを張る。
- ・ホームページの維持管理のため予算を組む（3万円程度）

4. 秋の研究会について

2008年の秋の研究会については、敷島千鶴先生（慶応大学）に依頼中との報告が安藤幹事よりあった。演題名が決まったら、次号のニュースレターに掲載することとなった。また、5月10日の研究会の酒井邦嘉先生（東京大学）の講演原稿も次々回のニュースレター（12月中旬発行予定）に掲載する予定。

（審議事項）

1. 奨励賞の新設について（継続審議）

今泉会長の発案により、双生児研究の若手研究者の育成を目指し、奨励賞の新設について議論されたが、具体的な案については次回の幹事会の継続審議となった。

2. 2010年1月の学術集会の大会会長について

今泉会長より、大木秀一幹事（石川県立看護大学）を推挙し、本人の内諾を得ているとの報告があり、出席した幹事全員の同意にて大木秀一幹事に決定した。

2007年度日本双生児研究学会総会報告

日時 平成20年1月27日(日) 13:00-13:30

場所 大阪大学コンベンションセンター 1階会議室

議題（報告事項）

1. 平成19年度の活動報告

- 1) 研究会（第25、26回）について
- 2) ニュースレターについて
- 3) 会員状況報告

2. 平成19年度の会計監査報告

3. 第22回学術講演会について
4. 平成20年度の活動予定
 - 1) 第23回学術講演会(2009年)の準備状況について
 - 2) ニュースレターについて
 - 3) 第27回研究会について
5. 平成20年度の予算計画について
6. 事務局の移転について
7. 名誉会員の推薦について
8. 学会のホームページについて
9. その他

日本双生児研究学会 平成19年度(2007.1.1~2007.12.31)会計収支報告

収 入		支 出	
前年度繰越	¥2,029,232		
会費収入	¥272,000	講演者謝金	¥30,000
平成17年度分 (5名)	¥15,000	講演者交通費	¥5,920
平成18年度分 (15名)	¥45,000	事務・消耗品費	¥1,501
平成19年度分 (59名)	¥207,000	会議費	¥13,000
平成19年度分(学生1名)	¥2,000	ニュースレター編集費	¥5,000
平成20年度分 (1名)	¥3,000	印刷費	¥19,214
		事務局人件費	¥60,000
		通信費	¥38,660
		第22回大会開催費補助費	¥100,000
		第25回研究会会場使用料	¥4,095
受け取り利息	¥2,963	支出合計	¥277,390
		次年度繰越金	¥2,026,805
合 計	¥2,304,195		¥2,304,195

以上、相違ありません。 平成20年1月23日

監査 管原 まあみ (印)

田中 輝子 (印)

日本双生児研究学会 平成20年度(2008. 1. 1~2008. 12. 31) 会計予算案

収入		支出	
前年度繰越	¥2,026,805	研究会謝礼	¥20,000
会費収入	¥309,000	講演者交通費	¥10,000
88人(136*0.65)*¥3000	¥264,000	事務・消耗品費	¥10,000
過年度分(15*¥3000)	¥45,000	会議費	¥30,000
利子	¥50	ニュースレター編集費	¥50,000
		ニュースレター印刷費	¥25,000
		事務局人件費	¥50,000
		通信費	¥50,000
		第20回大会開催費援助費	¥100,000
		研究会会場使用費	¥5,000
		大会招聘講師旅費	¥25,000
		事務局移転経費	¥10,000
収入合計	¥309,050	支出合計	¥385,000
		次年度繰越金	¥1,950,855
合計	¥2,335,855		¥2,335,855

お知らせ

会員の皆様

既に新聞等にてご存知の方も多いと思いますが、今年1月に大阪で開催された第22回日本双生児研究学会にて特別講演「**経済学における双生児研究の進展**」を話された大竹文雄先生（大阪大学社会経済研究所長、教授）が今年の日本学士院賞を受賞されました。これは、日本双生児研究学会にとっても大変慶ばしいことであり、ニュースレターの記事として紹介いたします。

日本学士院は学術上の功績が顕著な科学者を優遇するための機関として文部科学省に設置されており、明治12年に福沢諭吉を初代会長として創設され120年余の歴史を有する権威ある機関です。日本学士院賞は日本において最も名誉ある賞であり、大竹文雄教授の受賞は3月12日に発表され、日本双生児研究学会の会員を心強く思わせるニュースとなりました。日本学士院が公表した大竹文雄教授の受賞理由の要旨は下記の通りです。

大竹文雄（大阪大学社会経済研究所長、教授）

研究題目：日本の不平等

授賞理由：大竹文雄氏著の「日本の不平等 格差社会の幻想と未来」（日本経済新聞社、2005年）は政府等の統計やアンケート調査の結果を計量経済学的に分析し、日本における所得・賃金の格差問題の実態と原因を実証的に明らかにした画期的業績です。・・・(中略)・・・大竹文雄氏は早くから日本の所得・賃金の分布に関する諸問題に関心を寄せ、国際的な研究状況を参照しながら実証的研究を積み重ねてきましたが、本書はその集大成であり、日経・経済図書文化賞、サントリー学芸賞、エコノミスト賞を受賞するなど学会において極めて高い評価を受けている。

（文責：大阪大学 早川和生）

追悼

Dr. Elizabeth M. Bryan (1942・5・13～2008・2・13)

今泉 洋子 (日本双生児研究学会会長・兵庫大学)

ブライアン博士(以下、親しみをこめて敬称略)の訃報は Dr. Nancy L. Segal が twin research and human genetics の 6 月号 (vol. 11(3): 357-359, 2008) に詳しく書かれていますのでご覧ください。

1983 年 6 月にロンドンの Hotel Russell で開催された第 4 回国際双生児研究会議で初めてブライアンさんにお会いした。この会場でご著書 “The nature and nurture of twins” (London: Balliere Tindall) を購入し、サインをして頂いたことを昨日のように思い出した。その後 3 年ごとに国際会議でお会いし、旧交を温めてきた。この間、1992 年に東京で開催された第 7 回国際会議でのエピソードは天羽幸子氏が思い出を書かれていますので省略したい。ブライアンさんは 2001 年 7 月にロンドンで開催された第 10 回国際会議では会長を務められた。懇親会の席上でお父上にもお会いした。ブライアンさんの祖父が東京帝国大学で英文学を教えていた関係で、お父上は軽井沢で誕生したと話された。そのような関係もあり、ブライアンさんは非常に日本びいきであった。

第 20 回日本周産期学会長の藤村正哲先生 (大阪府立母子保健総合医療センター) はブライアンさんを 2002 年 1 月 18～19 日に開催された大阪での学術講演会に招聘された。そこで、第 16 回日本双生児研究学会学術講演会 (兵庫大学で 2002 年 1 月開催) の特別講演でブライアンさんに “The Nature and Nurture of Twins” についてお話をして頂く機会を得た。また、ブライアンさんご主人の Ronald Higgins さんの共著 “Infertility—New Choices, New Dilemmas” の日本語版 『不妊症—新たな選択とジレンマ』 (横山美江・大木秀一・野中浩一・吉田啓治・今泉洋子訳) も学会の前日に発売されたため、会場では休み時間を利用して、お二人が熱心に本にサインをされていた。

最後にブライアンさんにお会いしたのは、昨年 6 月にベルギーのアントワープで開催された第 12 回国際会議の席上でした。私は 2006 年 6 月頃にブライアンさんのメールで、すい臓がんの手術を受けたこと、そのため大学の職など公職を辞したことは報告を受けていました。会場でお会いしたブライアンさんはお元気そうに見えたので、その感想をお伝えしました。会場には最新の著書の表紙見本パンフレッドが置かれていました。この本は退院してからお亡くなりになるまでに、自分の家系のがんについて書かれた内容で、タイトルは “Singing the life: The story of a family in the shadow of cancer” (United Kingdom: Vermilion, 2007) です。会場でお会いした 8 ヶ月後にお亡くなりになるとは夢にも思っていませんでした。心からご冥福をお祈りいたします。

Dr. ブライアンを偲んで

天羽 幸子 (ツインマザーズクラブ)

ブライアンさん (Dr. をつけずにいつもこのようにおよびしています) が亡くなられたということ、The Multiple Birth Foundation の 2007 年の年間レポートに添えられた一枚の手紙で知り、彼女との 20 年間の交流が私の頭をよぎりました。

はじめてお目にかかったのは 1989 年、ローマでの国際学会でした。たった一人で会の内容もよくわからずぼんやりしている私に丁寧に COMBO の組織など説明してくださり、双生児研究学会と母親の支援組織のあり方がわかったのです。その後の 3 年間は、次は東京でこの学会の開催を引き受けることになっていたため、Social events や COMBO としての会の持ち方など、ずっしりとした責任の重さを感じました。

今回、彼女の写真と共に紹介したように、彼女はお父様が日本で生まれられ、日本には特別な親

近感を持っておられました。学会開催前に、『ふたご・みつごの発育と育て方』という本を、ツインマザーズクラブのお母さんの手で翻訳して日本語版として出したいというご希望があり、帝京大学の三浦悌二先生、中村泉先生のご協力で、ベネバル出版から本となるということもありました。

1992年、東京医科大学を会場に第7回国際双生児研究会議の開催の折、私は双生児研究者や活動家ばかりではなく、普通のふたごのお母さんとの話し合いの場を持ちたいと考えていたので、昼休みを利用し、私の家を開放してホームパーティーを開きました。ブライアンさんは午後の部の司会をなさる予定があったのに、喜んで参加してくださり、のり巻きの太巻きを手ぎわよくまとめて花をつくるお母さんの見事な手際に感嘆の声をあげ、ゆかたを着ていただいて写真をとる時に、帯びの結び方をとても気に入ってくださり、いつもより大はしゃぎのブライアンさんでした。

その後、リッチモンド、ヘルシンキの学会でも、ロンドンの Queen Charlotte's & Chelsea 病院での多胎児支援の組織的活動など、私たちツインマザーズクラブの活動の指針となるような具体的研究と活動の実践を示してくださいました。いつもたやすことのない笑顔の中に、活動のパイオニアとしての凜とした情熱を感じる時があり、私は彼女からはげまされることが多かったのです。

この数年、私も体調を崩して、国際学会に出席できないまま、2001年の兵庫大学での講演の折お目にかかったのが、最後になってしまいました。

長寿傾向の現在、彼女の早すぎるお別れは、まだまだ教えていただくことがあったのに、私はじめ、彼女にお目にかかったツインマザーズのみんなは、心からさびしく、残念に思っています。



「私はこの本の翻訳が最初に日本で出版できたことを特別に喜んでおります。ふたごの研究では日本の貢献は顕著ですし、ふたごの親たちを支える会、ツインマザーズクラブの発足が世界でも一番早い方だったのは誇れることだと思います。

私が嬉しいのは、その他にも個人的な理由があるのです。私の父は日本で生まれましたし、私の祖父と母とは日本で生活が長かったのです。祖父のキャノン・イングラム・ブライアンは英国国教会の司祭であり、一流英語新聞の寄稿者だったほか、東京大学で講義をしていたこともありました。」

(『ふたご・みつごの発育と育て方』「日本語版への序文」より)

日本双生児研究学会第26回研究会のお知らせ

日 時：2008年11月8日

場 所：未 定

発 表：敷島千鶴（慶應義塾先端研究センター研究員）

「社会的態度の遺伝と環境—双生児法を用いた検討—」



編 集 後 記



例年になく暑い夏ですが、みなさまお元気で教育・研究にご活躍のことと存じます。第23回学術講演会のご案内を掲載した『ニュースレター』をお届けします。次号以降のため、海外の学術雑誌へ投稿された場合、どうぞサマリー等をお寄せください。編集委員 志村 恵（金沢大学） 横山美江（大阪市立大学）